

小説痴情の研究

北上次郎



ちくま文庫

情痴小説の研究

北上次郎



情痴小説の研究

二〇〇一年十月十日 第一刷発行

著者 北上次郎 (きたがみ・じろう)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 一―一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四一―三三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市柳引町二一六〇四 一―三三―一八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© JIRO KITAGAMI 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-03667-9 C0195

ちくま文庫

情痴小説の研究

北上次郎



情痴小説とは何か

四半世紀以上前に観た映画なので、題名も忘れてしまったが、あれは松竹映画だったと思う。そのラストシーンは駅の別れである。若い男が見送りに来て、列車の中には若い女性が乗っている。ガラスドア越しの対面シーンだ。会話は何もない。女性の指がガラスをたどると、「スキ」という文字。男は何も言えず、出ていく列車を黙って見送るというラストシーンだった。映画史に残るような名作でもなく、プログラム・ピクチュアの本一だが、このシーンを今でも覚えてるのは、胸がキュンとなった若き日の記憶が、体のどこかにかすかに残っているからだろう。

ところが、年月がたつと、だんだんこちらの胸も簡単にはキュンとならなくなってくる。たとえば、宮本輝の『青が散る』だ。これを読んだのは三十代の半ばだったが、今でも忘れられない一冊になっているのは、当時学生諸君と話していたら、浜辺のシーンで胸がキュンとなったという声が多かったからである。主人公の青年が好きな女性を追いかけてきて、浜辺に呼び出すシーンで、その前夜、別の男に何度も抱かれたと彼女から告白される場面である。そういうシチュエーションに同世代の若者たちが切ない心情になるのは理解できなくも

なかったが、しかし三十代の私は、残念ながら彼らほど感情移入できない。浜辺のシーンを読んでいても、どこかに他人事のような風情があった。

これが四十歳をすぎてくると、若者たちの恋に対する、この「他人事のような風情」はますます強まっていく。若い男女が登場する恋愛小説そのものにめつきり興味がなくなってくるのだ。若者の恋など勝手にやっておくれ、という気持が先に立ってしまったのである。年月を重ねると若いときには見えなかったものが見えてくる。若いときの恋など、あとから振り返れば恥多きことばかりなのだ。だから、そう簡単には胸キュンとはならなくなってくる。

かわりに感じ入るのは、たとえば佐江衆一『花下遊樂』のような作品だ。これは、ガンに侵された五十七歳の男が、同じようにガンに侵された中年女性と佃大橋の上で出会い、家に帰らずに束の間の生活を唐突に始めていくという話で、こういうシチュエーションにしばらくするのである。あるいは、高井有一『夜の蟻』のような作品がいい。こちらは、何事も起きない初老男の生活を描くもので、恋愛話など一つも出てこないが、その平穏な日常の中にこそ激しいドラマを感じるのである。もし若き日に、私が『花下遊樂』や『夜の蟻』のような作品を読んだら、おそらく退屈のあまり途中で本を閉じていただろう。ところが四十歳をすぎると、こういう世界がもう他人事ではない。キャンパスの恋よりも、ごく身近な話なのである。親近感を覚えるのである。ようするに若い頃は、中年男の恋愛話など、絶対に近づきたくないほど薄汚いものに見えていたのに、自分の年齢がそのあたりにさしかかると、今度は若い連中の恋愛話が深みのない軽薄なものに見えてくるのだ。勝手なものだが、そうなって

しまうのだから仕方がない。

情痴小説に興味を持ち始めたのも、四十歳をすぎた頃からだ。妻子ある中年男が色情に迷って理性を失う物語が、なんだか他人事ではないような気がしてくる。情痴小説は、ようするに、ダメ男小説だ。分別あるべき中年男が色情に迷うのだから、家庭人としても社会人としても、ダメ男としか言いようがない。ところが、こういう男に親近感を覚えるのである。あるいは、心が慰められるのである。それは、ダメ男が我々を映す鏡だからだ。

中年から初老にかけて、未来はもはや失われている。これまでの日々をけつして後悔しているわけではないが、しかし、なすべきこともすでに決まっているし、新しいことは何ひとつとしてない。あとはそのレールの上を歩いていくだけだ。中年の安定とその味気なさは裏表である。そんなとき、色情に迷って逸脱していくダメ男の姿が浮上してくる。あのダメ男たちは我々の胸の裡に棲む火宅の心に他ならない。

情痴小説を分析してみると、主人公の特徴として次の五つの条件をあげることができる。

それは、①主体性に欠けること②優柔不断であること③反省癖があること④自己弁護がうまいこと⑤何事にも熱中しないこと。この五つだ。もちろん、この五つを満たさなければ情痴小説には絶対にならない、ということではない。必ずしも、すべての情痴小説がこの五つの条件を持っているというわけではない。現実にも、全然反省しない主人公はこのジャンルにたくさんいるし、自己弁護しない主人公のほうが迫力あふれる情痴小説になるケースもすくなくない。共通項を探ると、この五つの条件が浮かびあがってくるということである。この

中で一つだけ、何事にも熱中しないこと、という五番目の特徴は、すぐ熱中する性格だから他の女性にもふらふらと引き寄せられていくんじゃないの、と奇異に思われるかもしれない。しかし、違うのである。熱中しないからこそ情痴小説の主人公は次々に女に手を出していくのである。

この五つの条件を並べてみると、これは情痴小説の主人公の条件であるばかりでなく、我々のことでもあるような気がしてくる。主体性に欠け、優柔不断で、反省癖があり、自己弁護がうまく、何事にも熱中しないというのは、我々、中年世代の特質に他ならないのではないか。いや、一般論にしてしまつてはいけないな。それは私の特質だ。情痴小説を読むたびに、お前、それはないだろ、と言いたくなるのは、自分に対する掛け声なのである。

本書では三十三人の作家を取り上げ、その作品をテキストにした。これらの情痴小説に登場する、泣き虫で、身勝手で、独善的で、流されてゆく男たちが巻き込まれる、いや巻き起こす修羅場は、けつして他人事ではない。したがって鏡に映るおれの姿を見るような気がして時には嫌になつてくるが、しかしそれが結構好きだったりもするから困つてしまう。こういうダメ男小説を読みながら心がなごんでくるというのは、まったく困つたことである。

目次

情痴小説とは何か

3

身勝手な男の本音

徳田秋声『仮装人物』

13

泣き虫男の独善

田山花袋『蒲団』

20

陰気な追跡者の恋

近松秋江『黒髪』連作

26

若い女への執着

高見順『生命の樹』

33

最後の恋の行方

石川達三『四十八歳の抵抗』

40

女好きの色嫌い

北原武夫『情人』他

47

憎々しい男の造形

丹羽文雄『献身』他

66

不思議な男女たち	武田麟太郎『銀座八丁』	79
わがままなヒロインたち	舟橋聖一『蜜蜂』	86
家庭嫌いの男	岩野泡鳴『発展』他	93
明朗型の色事師	里見弴『多情仏心』	106
偽善者の告白	島崎藤村『新生』	113
性の死滅への不安	川崎長太郎『抹香町』他	120
錯乱と狂態の中年像	葛西善蔵『蠢く者』他	127
性に執着する老人たち	和田芳恵『接木の台』他	134
反省癖のある男	森田草平『煤煙』	141

辛辣に描かれる妻 林芙美子『茶色の眼』

148

放蕩児の生涯 瀬戸内晴美『色徳』

155

年下男への愛と情欲 円地文子『私も燃えている』

161

なにも言わぬ恋 中里恒子『時雨の記』

168

主体性のない男 宇野千代『おはん』

175

ダメ男の素顔 川上宗薫『蜜月』

182

男が女を抱かない理由 三浦朱門『犠牲』他

189

人妻に溺れる青年 高橋昌男『蜜の眠り』

214

妻の処女にこだわる男 嘉村礒多『業苦』他

221

怒りまくる男の恋 小檜山博『夢の女』

228

流されてゆく男 岳真也『水の旅立ち』

235

颯爽としたヒロイン 石和鷹『クルー』

242

何も語らない男 宇野浩二『思い川』

249

旅する男の恋 檀一雄『火宅の人』

256

軀だけを求める男 吉行淳之介『暗室』

263

美を愛する男女の恋 立原正秋『春の鐘』

270

一般論の男 渡辺淳一『ひとひらの雪』

277

解説 清水良典

285

情痴小説の研究

身勝手な男の本音

徳田秋声『仮装人物』

徳田秋声『仮装人物』はおそろしく読みにくい小説である。たとえば、こんなふうだ。

或時は庸三と、庸三がつれて行つて紹介した流行作家のC氏と二人で、映画会社のスタジオを訪問したり、或時は又震災後の山の手で、芸術家のクラブのようになっていた、その頃の尖端的な唯一のカフェへ紹介されて、集まつて来る文学者や画家のあいだに、客分格の女給見習いとして、夜ごと姿を現わしたりしていたものだったが、彼女は疾く裸になつてしまつて、いつも妹の派手なお召の一張羅で押し通していた。

一回読んだだけでこの文章の意味がすぐわかる人を私は尊敬する。これが徳田秋声の小説に共通する文体なのか、それとも『仮装人物』の持つ特殊性なのか、研究家でない私には判断がつかないが、それにしてもわかりにくい。

それはともかく、ここに登場する庸三が本編の主人公である。職業は作家だが、これがと

んでもない男で驚く。その前に相手役を紹介しておく、小説家志望の梢葉子。この奔放な女性に老作家が振りまわされる姿を描くのが『仮装人物』なのだが、はたして本当に主人公が振りまわされていたのかどうかとの問題はとりあえず置くとして、梢葉子が惹かれていく男を順に並べると、最初の夫松川、出版屋一色、画家山路草葉、郷里の代議士秋本、文学者清川、医師のK博士、園田青年、となる。これだけ次々に男を変えていくのを見ると、たしかに葉子は奔放で情熱的な浮気性の女性のようにも思える。「情熱の虫がこの体に巣喰っている！」と叫び、「わたし先生を殺すかもしれないことよ」と言って、庸三の首を絞めたりする女性なのだ。彼女が庸三に近づいたのも、作家として世に出るためのもので、女性として愛していたかどうかは保証のかぎりではない。

しかも葉子は経済観念のない女性であり、昔の夫松川が拐帯してきた会社の金の一部を受け取ったあとで、別れた妻子の生活のためにくれた金と知りながら、その金を持って平然と鏡台や簞笥を買に行ったりする。さらに、金に困ると秋本から電報為替で金を送ってもらい、そのことについて「そんなに金を貰ってもいいのか」と庸三に言われても「いいのよ、有るところには有るものなのよ」と言う女性なのである。しかし吝嗇家というわけではない。庸三と一緒に料亭に行っても、払いを自分でしたりするのだ。ようするにケチというより、ただ経済観念が欠落しているにすぎない。

入院しているときに見舞いに来た庸三に向かって、「女が病院へでも入ってる場合には、男つてものは偶にお金くらい持つて来るものよ」と言ったりするが、これも吝嗇家の言とい